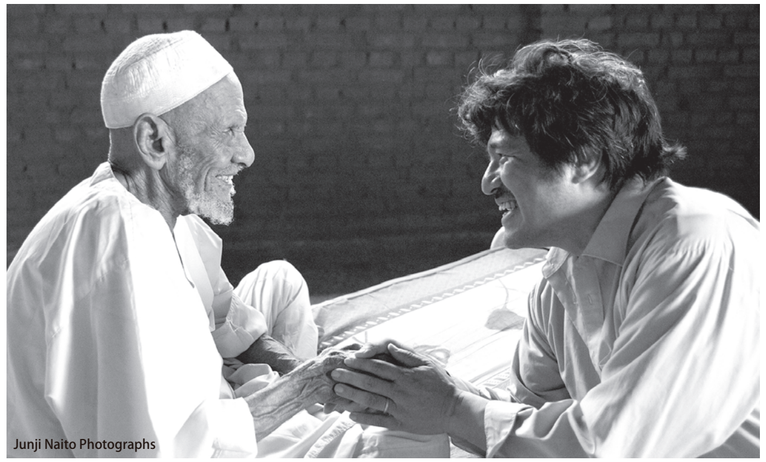
遠回り

《第35号》
認定NPO法人ロシナンテス
発行
〒802-0082
北九州市小倉北区古船場町1-35
北九州市立商工貿易会館 7F
TEL：093-521-6470
E-Mail：info@rocinantes.org
特定非営利活動法人ロシナンテス
ROCINANTES

スーダンだより
救急車／国連と協働事業… 2面
ザンビアだより
結核巡回検診先を追加…… 3面
20周年特集…… 4面
ザンビアだより
新エコー導入 …… 6面
イベント情報 …… 7面
事務局からのお知らせ ……8面

ロシナンテスは設立20周年を迎えました。これまで支え続けてくださったすべての皆さまに、心より深く感謝申し上げます。


Junji Naito Photographs

ロシナンテス設立20周年
― 共に歩む、未来への決意 ―

理事長　川原 尚行

「目の前のひとりを救いたい」から始まった

大使館勤務時代、スーダンで目にした光景が原点です。病院には患者があふれ、建物に入りきらない人々が、木の下でひとつのベッドに複数人が重なって横たわっていました。その現実を目の当たりにしたとき、「目の前のひとりでも救いたい」という思いが胸に湧き上がりました。そして外務省を辞し、スーダンで医療支援に取り組むことを決意しました。

仲間と共に築いた20年

当初は、自分ひとりでもできることをすればよいと考えていました。しかし実際には多くの仲間の存在に支えられました。共にスーダンへ渡った仲間、日本で団体設立に尽力してくれた仲間。それぞれの想いが重なり、2006年にNPO法人ロシナンテスが誕生しました。ひとりの力は小さくとも、集まることで大きな力になる。その信念が「ロシナンテス」という名前に込められています。

支援を超えて、共に生きる

最初の活動地であるガダーレフ州シェリフ・ハサバッラ村は、当初「支援に来てもすぐにいなくなる存在」と見られていました。しかし関わり続ける中で信頼が育まれ、「ロシナンテスは我々と同じ部族だ」と言っていただけるようになりました。私たちは支援する側とされる側という関係を超え、共に生きる存在となりました。村人が亡くなれば共に涙を流し、若い二人が結ばれるときには皆で祝い、命が誕生すれば共に喜ぶ。この日々の積み重ねが、何にも代えがたい絆を築いてきました。

ロシナンテス設立初期のメンバーたち

内戦という困難

しかし、スーダンの情勢は次第に厳しさを増していきました。南スーダン独立以降、経済悪化やクーデター、政情不安を経て、2023年には内戦へと突入しました。自衛隊機によって日本人スタッフや私自身の命は救われましたが、現地では今も多くの人々が苦しんでいます。すぐに手を差し伸べることができない現実に、無力感と葛藤を抱え続けてきました。

内戦の状況を見極めながら支援再開の準備を進め、現在では難民キャンプを含む地域で、エコー診断装置やポータブル・ヘルス・クリニック（PHC）を活用した巡回診療を開始しています。厳しい環境の中でも、できることを一つずつ積み重ねていくしかありません。

未来へつなぐ、新しい挑戦

一方で、2019年より新たにザンビアでの活動も開始しました。日本の大学や企業と連携し、デジタル技術を活用した医療支援を推進しています。AIによる診断が可能なポータブルX線装置や、エコーによる妊婦健診など、新たな医療のしくみが実現しつつあります。

さらにスーダンに続きザンビアでも、ポータブル・ヘルス・クリニックの導入準備を進めています。この研修にはバングラデシュからの専門家に協力いただいています。日本のみならずアジアと連携しながらアフリカを支える新しい形に、大きな可能性と希望を感じています。

次の10年へ 新しい医療の形

この20年を振り返る中で、変わらないものがあります。それは「現地の人々と共に歩む」という姿勢です。外から一方的に与える支援ではなく、同じ目線に立ち、共に考え、共に築いていく。その信念は、これからも決して変わることはありません。

Junji Naito Photographs
ハサバッラ村の人々と救急車の到着を共に祝う（2007年）

ザンビアでは、持ち運び可能なX線装置を活用し、結核の巡回検診を展開

※堅忍不抜（けんにんふばつ）…つらく苦しいことがあっても、がまん強く意志を貫くこと

一方で、変わっていかなければならないものもあります。それは支援の形です。これまでのように医師個人の力に頼るだけでは限界があります。現地の人々が主体となる医療体制づくりにおいて、AIやICTといった新技術はその可能性を大きく広げるものです。医療資源の乏しい地域だからこそ、こうした技術が大きな恩恵をもたらすと確信しています。

これからの10年は、これまで以上に急速な技術革新が進む時代となるでしょう。その変化を力に変え、日本、そしてアジアの国々と連携しながら、アフリカの地で新しい医療の形を切り拓いていきたいと考えています。

「堅忍不抜」

今、私はスーダンに身を置き、現地の人々と内戦の苦しみを共にしています。しかし、いつの日か内戦が終結し、新しい医療によって人々が健康に生きられる未来を実現したいと強く願っています。「堅忍不抜」（※）の精神を胸に、これからも一歩一歩、着実に活動を続けてまいります。

最後に、これまでロシナンテスの活動を支え続けてくださった皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

事務局だより

いつもロシナンテスの活動に心をお寄せいただき、本当にありがとうございます！
おかげさまで当団体は今年、設立20周年を迎えることとなりました。

ご支援者の皆さまをはじめ、多くの方々のご支援とご協力に支えられ、これまでスーダンとザンビアで活動を続けてくることができました。心より感謝申し上げます。

ご支援者の皆さま、スーダンとザンビアの地域の方々、そしてロシナンテスのスタッフ。普段は顔を合わせることのない私たちが、同じ方向を向いてつながり、共に歩んでいることは奇跡だと思っています。

このご縁に感謝しながら、20周年という節目を新たな出発点として、これからも皆さまからの温かいご支援を、必要とされる方々へ、必要とされる場所へ、心を込めて届けて参ります。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

私たちＮＰＯ法人ロシナンテスの名前は、小説「ドンキホーテ」に出てくるドンキホーテが乗る痩せ馬のロシナンテに由来しています。「私たち一人一人は痩せ馬ロシナンテのように無力かもしれないが、ロシナンテが集まり、ロシナンテ**ス**になれば、きっと何かできるはずだ！」と考え、「ロシナンテス」と名付けました。
今後もこれを信念として一歩一歩進んでいきたいと考えておりますので、皆さまのご支援をよろしくお願い致します。

ロシナンテス応援企業

内科・外科・消化器内科・緩和ケア内科
医療法人 明気会
岩本クリニック
理事長　岩本拓也
北九州市小倉南区中貫一丁目20-50
TEL 093-472-1281
FAX 093-472-6712

がんばれロシナンテス!
税理士法人
小城会計事務所
北海道旭川市東光８条１丁目1-1
TEL.0166-31-2313

内科／消化器内科／リウマチ科
柏木内科医院
院長　柏木 陽一郎
福岡県北九州市小倉北区片野2-21-10
tel 093-921-7943
http://www.kashiwagi-naika.com/

ロシナンテスのスタッフを応援します!!
日常の事業活動の利益を
NPO活動の篤志へ繋げたい
時計宝飾・古物売買
株式会社 ブランドリーネ
代表取締役 青山晃一
〒276-0046
千葉県八千代市大和田新田355-16-103
TEL:047-450-5720
yachiyo@e-daikoku.com
https://shop.e-daikoku.com/info/spot/detail?code=0000000239

遺贈に関する資料請求フォームができました

ロシナンテスではこの度、遺贈に関する資料請求フォームを開設しました。遺贈とは、遺言を通じてご自身の財産の一部を社会に役立てる寄付のことです。近年、「法定相続人がいない」「社会への恩返しがしたい」など様々な理由で、NPO法人や公益法人などに、遺産を寄付したいと考える人が増えています。

本フォームからは、遺贈に関する基礎知識や具体的な手続きの流れ、よくあるご質問などをわかりやすくまとめた「遺贈・相続寄付ガイドブック」をご請求いただけます。

また、ご希望の方には、もしものときに備えて大切な情報を1冊にまとめておける「エンディングノート」も併せてお送りしております。ご自身の歩みや大切にしてきたことを書き留める一冊として、ご家族と将来について話し合うきっかけになれば幸いです。

ご関心をお持ちの方は、まずはお気軽に資料をご請求ください。

遺贈に関する資料請求はこちら
https://www.rocinantes.org/request/bequest/

ウェブサイト各種情報変更ができます

ロシナンテスでは、簡単に各種情報の変更手続きをしていただけるよう、ウェブサイトに「各種情報変更」フォームをご用意しています。住所や電話番号などの基本情報のほか、メールマガジンや郵送物の設定、継続寄付に関する情報の更新もお手続きいただけます。

【ウェブサイト変更できる内容】
- 住所・電話番号・メールアドレスなどの基本情報
- メールマガジンの配信先変更・解除
- 郵送物の停止
- 継続寄付に関する変更（寄付金額・支払方法・停止連絡）

お急ぎの場合やフォームの入力が難しい場合は、お電話でも承っております。TEL 093-521-6470（平日10時～17時）

各種情報変更ページはこちら
https://www.rocinantes.org/change/

冬の古本寄付キャンペーンへのご協力ありがとうございました

ご寄付点数	2,972点
ご協力くださった方	45名
寄付金額	115,583円

昨年12月1日から実施しておりました「スーダンに救急車を届ける！冬の古本寄付キャンペーン」は1月31日に無事終了いたしました。左記の通り、多くのあたたかいご支援をお寄せいただきました。

ご自宅やオフィスにある古本やDVD等をお送りくださった皆さま、周囲の方にお声がけくださった皆さまに、心より御礼申し上げます。

なお、お寄せいただいたご寄付は、主に「救急車をスーダンに届けるプロジェクト」に活用させていただきます。プロジェクトの進捗については、本誌2面にご報告しておりますので、合わせてお読みいただけましたら幸いです。改めまして、あたたかいご協力をいただき誠にありがとうございました。

スーダン内戦から、3年。「想像の、数段上をいく」スーダンのウェブマガジン、4/15オープン

「スーダンには、この時代を強く、やさしく、生き抜くヒントがある。」
ロシナンテスは、スーダンをテーマとした特設ウェブサイト「SUDAN Magazine」をオープンしました。

■ 内戦中も営まれるスーダンの人々の暮らし

スーダンで内戦が勃発してから3年。医療が届かない地域も、安全な水が出ない地域もあります。しかし、そこには失われていない、ゆたかさがある―。
苦しいときほど人に手を差し伸べる。困っている人を、ひとりにしない。試練の中でも一筋の希望を信じる。そんな人々が、スーダンには生きています。

■ スーダンを、好きになってほしい

2026年はロシナンテスにとって設立20周年の節目の年です。しかし、設立当初からの活動地であるスーダンが内戦の中にある今、手放しで「20周年おめでとう」と祝うのは少し違う気がする…。だからこそ、この20周年をスーダンを知ってもらう年にしたいと考えました。「かわいそう」でも「遠い国の話」でもなく―スーダンが、好きになる。そんなサイトを目指しています。

「スーダンを、知れば知るほど、ダンダン、わたしの世界が変わる。」記事は順次公開予定。ぜひお楽しみに！

特設ウェブサイト「SUDAN Magazine」
https://www.rocinantes.org/sudan

スーダンだより

Sudan

灼熱の大地で奔走するロシナンテたちの“いま”

現地の要請に応えてスーダンへ救急車を寄贈

現在ロシナンテスでは、内戦中のスーダンに救急車を寄贈する取り組みを進めています。昨年末、救急車が無事スーダンの港に到着しましたのでご報告いたします。

ポートスーダン港に到着した4台の救急車

長期化する内戦で医療が機能不全に

2023年4月15日、スーダンで軍事衝突が勃発しました。長期化する内戦により、多くの人々が難民や国内避難民となり、困難な暮らしを余儀なくされています。2025年時点では3千万人以上が人道支援を必要としていると報じられ、12以上の地域で飢餓の瀬戸際、あるいは飢餓状態が確認されています。国内の一部地域ではインフラが崩壊し、基本的なサービスへのアクセスが著しく制限されています。2025年のHeRAMS Sudan baseline reportによると、かつて国民の保健サービスの70％を担っていた首都ハルツームでは、38％の医療施設が機能不全に陥り、問題なく稼働している病院はわずか14％にとどまっています。コレラ、ジフテリア、マラリア、デング熱などの感染症の流行も深刻です。

救急車の不足

病院が襲撃され、救急車が奪われる被害も発生しています。現地政府によれば、国内に約1千台あった救急車は現在わずか200台ほどにまで減少しました。救急車がない地域では、代わりにロバを使って患者を搬送するケースもあるといいます。こうした状況を受け、神奈川県横浜市から2台、福岡県北九州市から2台、計4台の中古救急車を寄贈することが実現しました。本来、スーダンでは中古車の輸入は禁止されていますが、今回は特別措置として輸入が認められました。

北九州市の救急車は、北九州青年会議所の皆さまのご尽力で寄贈が実現しました！

SFPAへの贈呈式典の様子

約1年かけて納品

輸出書類の作成や通関手続き、船積みの手配、スーダン側での受け入れ調整などを経て、今年に入り無事スーダンでの受領が完了しました。通関業者とのやりとりはオンラインでは難しく、理事長の川原が何度も渡航する必要がありました。およそ1年をかけて、救急車を無事スーダンで受領することができました。

4月に式典を開催

寄贈した救急車は、首都ハルツームや港町ポートスーダンの病院のほか、国連機関と共に活動する地域の支援組織で活用される予定です。

このうち1台は、ロシナンテスのパートナー団体であるスーダン家族計画協会（SFPA）に寄贈することが決まり、4月8日に贈呈式典が行われました。スーダン家族計画協会は、1965年に産婦人科医を中心とした専門家によって設立された団体で、妊産婦・新生児・乳児の死亡率および罹患率の低減を目的に、長年にわたりスーダン国内で母子保健分野の活動を行っています。寄贈した救急車は、巡回診療車として活用されます。

その他の3台についても各地域に配備が完了次第、改めてご報告いたします。

紛争下のスーダンで妊婦さんに医療を届ける事業を開始

ロシナンテスは、国連人口基金（UNFPA）と協力し、スーダンでデジタルヘルスの導入を進めています。

デジタルヘルスの実証事業

UNFPAによると、スーダンでは長期化する内戦の影響で約1100万人が国内避難民となり、世界の国内避難民の約13％を占めています。また、約120万人の妊産婦が栄養不良の状態にあると報告されています。

こうした状況を受け、2025年10月、UNFPAからロシナンテスに対し、日本政府の補正予算を活用して、スーダンで母子保健事業を行えないかという提案がありました。まずは比較的治安が安定している紅海州で、デジタルヘルスを活用した実証事業を開始しています。

妊婦さんに継続的な医療を届ける

本事業では、妊婦さんへ質の高い保健医療サービスを継続的に提供することを目指しています。具体的には、

- ●助産師が母子保健の知識や技術、デジタルヘルスの活用方法を学ぶこと
- ●遠隔医療システム「ポータブル・ヘルス・クリニック（PHC）」を使い、家庭訪問で妊婦に専門的なケアを届けることに取り組みます。

エコーで妊婦さんの健診を行う様子

医師と遠隔でやり取りをする様子

ポータブル・ヘルス・クリニックとは

紅海州、リバーナイル州、北部州には、合わせて約140万人以上の国内避難民が暮らしています。避難民の流入により、医療や福祉サービスへのアクセスは極めて限られています。

こうした地域で医療を届ける手段として期待されているのがデジタルヘルスです。本事業で導入しているポータブル・ヘルス・クリニックは、検査機器、データ管理アプリ、通信システムを組み合わせた遠隔医療システムです。検査データを入力すると健康状態を判定し、異常があれば遠隔の医療従事者に通知されます。このシステムは九州大学とバングラデシュのグラミン・コミュニケーションが共同開発しました。現在は超音波検査機器を組み込んだ母子保健向けモジュールへと改良されています。

研修のためにスーダンへ渡航した理事長川原（左）

事業は、ロシナンテスが資金配分や物流支援、研修運営を担当し、九州大学とグラミン・コミュニケーションがポータブル・ヘルス・クリニックの導入や研修を担当しています。現地での運営やモニタリングは、スーダン家族計画協会（SFPA）が担っています。

難民キャンプで巡回診療がスタート

2026年1月には、IT専門家と看護師を招いて研修を実施しました。その後2月から、紅海州の難民キャンプでポータブル・ヘルス・クリニックを活用した巡回診療が始まりました。難民キャンプでは医療体制がひっ迫し、十分な医療を受けられない状況が続いています。医療が届きにくい場所で、新しい医療の仕組みづくりが動き出しました。

遠隔診療への挑戦と通信の壁

ポータブル・ヘルス・クリニックでは、医師がその場にいなくても健診を行い、必要に応じて遠隔で医師につなぐことができます。しかし現地では通信環境が不安定で、遠隔診療を安定して行うためのインターネット環境整備が課題です。現在、衛星インターネット「Starlink」の導入も検討していますが、利用には政府の許可が必要なため調整を進めています。

また現地からは「母子保健だけでなく他の病気も診てほしい」という声も寄せられています。目の前の命を守ることと、持続可能な医療の仕組みづくりの両立を目指しながら、一歩ずつ取り組みを続けていきます。引き続き、温かく見守っていただけますと幸いです。

ザンビアだより

新たに2施設で始動 地域主導で拡がる結核巡回検診

ロシナンテスは、世界三大感染症のひとつである結核の問題に対処すべく、2023年よりザンビアで活動しています。富士フイルム株式会社のポータブルX線装置を活用し、村落部で巡回検診を行うことで、結核を早期に発見できる仕組みづくりを進めてきました。

ガイドライン制定で円滑な運営が可能に

事業開始からおよそ3年が経ち、いまや現地医療スタッフのみで巡回検診を安定的に運営できる体制が整いました。以前はポータブルX線装置の国家レベルの運用指針がありませんでした。そのために、病院から診療所へ装置を運んでX線検査を行う際、許可の取得に時間がかかってしまい、運用の大きな壁となっていました。しかし2025年7月、関係各所が協力して策定した「ポータブルX線装置の国家運用ガイドライン」が公布され、巡回検診体制の拡大が円滑に進められるようになったのです。

聖トーマス病院（約6,000人の住民が対象）

聖トーマス病院で検査を受ける子ども

新たにチボンボ郡の2施設で巡回検診開始

2025年12月には、中央州チボンボ郡の聖トーマス病院とムングレ病院の2施設を新たな巡回検診先として登録し、X線検査を開始しました。両施設にはこれまでX線装置がなく、患者さんはバスで2、3時間かけて都市部へ移動する必要がありました。2023年に郡内のムワチソポラ病院にポータブルX線装置を導入したことで一定の改善は見られたものの、それでも通院が難しい住民も多くいました。そこで郡保健局や各病院と協議を重ね、隔週で巡回検診を実施することになりました。

検査室については、聖トーマス病院では空き部屋を改修して使用しています。ムングレ病院では空き部屋がなかったため、本事業で初めて屋外にテントを設営して実施しています。

初回の巡回検診では、聖トーマス病院で37名を検査し、結核患者4名と骨折患者4名を診断しました。ムングレ病院では15名を検査し、結核患者1名と骨折患者10名を確認しました。いずれの患者さんも検査当日から治療を開始しています。開始直後から複数の患者が確認され、X線検査を早期に導入する意義を感じました。重症化の防止や地域内感染の抑制にもつながると期待しています。

ムングレ病院（約15,000人の住民が対象）テントでの撮影準備の様子

地域主導で進む結核対策

現在は、郡保健局と各病院が主導し、ロシナンテスの直接的なサポートがなくても巡回検診が継続されています。これは「地域の人たちが医療を自分たちのものとし、地域だけで医療を継続できる仕組み」が整い始めていることを示しています。今後ロシナンテスは、結核ボランティアと連携しながら、啓発活動やスクリーニングを計画的に進めていく予定です。

適切な処置で重症化を防ぐ ポータブルX線装置を活用した骨折対応研修

ロシナンテスは2023年12月、ザンビア中央州チボンボ郡ムワチソポラ病院にポータブルX線装置を導入し、結核の早期診断を目指す活動を続けてきました。この病院では、X線装置を外傷など結核以外の診断にも活用してきましたが、医療スタッフから次第に「骨折への対応が十分にできていない」という声が上がるようになりました。こうして生まれたのが「骨折対応研修」です。

結核事業のなかで見えてきたもう一つの課題

ムワチソポラ病院は、チボンボ郡で唯一、X線検査が可能な病院でした。しかし、周辺の村落部にある診療所では、骨折と打撲を見分けることが難しく、適切な応急処置が行われていないという課題がありました。骨折が疑われても、

- ●診療所では対応できず、様子を見る
- ●病院への移動手段がなく、受診が遅れる
- ●伝統的治療に頼り、骨が変形してしまう

といったケースが少なくありません。

骨折患者の多くが、子どもや20歳未満の若い世代です

ポータブルX線装置を使い、骨折か打撲かを確認しながら実践的に学ぶ

処置が遅れて手術が必要になった場合、最低でも約7万円の費用がかかります。一方で、村落部の農家の月収は約1万2千円ほどです。適切な処置が遅れることで、その後の生活や仕事に大きな影響を与えてしまう可能性があります。

そこで2025年12月、ロシナンテスの支援により、3日間の骨折対応研修を実施しました。目的は、

- ●骨折症例を早期に見分けること
- ●地域で安全な応急処置を行うこと
- ●病院への紹介とフォロー体制を整えること

です。医療従事者だけでなく、地域の村長、牧師、伝統的治療師など、計26名が参加しました。

研修の様子と活動内容

研修初日は、病院の理学療法士による座学です。骨折の症状や応急処置の重要性、放置した場合に起こる変形や機能障害について理解を深めました。

2日目には、実際の患者を招いた実習が行われました。X線画像による骨折の見分け方や、身近な物を使った応急処置の方法を練習しました。

3日目には、診療所や地域から病院への患者搬送の流れを確認しました。SNSグループを活用し、応急処置の状況や患者情報を共有し、病院側が対応結果をフィードバックする仕組みも整えました。

伝統的治療師や牧師からも、「病院につなぐ前の初期対応の重要性を初めて知った」「地域で実践していきたい」といった声が聞かれました。

研修後、診療所で適切な応急処置が行われ病院へ搬送されるなど、すでに良い変化が生まれています。結核対策として導入したポータブルX線装置がきっかけで、地域に学びと連携が生まれ、骨折などの外傷にも早期に対応できる体制づくりが進んでいます。ロシナンテスはこれからも、現地の人々と協力しながら、ザンビアで地域医療の強化に取り組んでまいります。

ザンビアだよりは6面に続きます

研修参加者の声

講師を務めた理学療法士のティモシーさん

「医療者も住民も、骨折対応の知識が不足していました。今回、皆が知識と技術を共有できたことで、地域全体が前に進んだと感じています。」

研修を受けた診療所スタッフのマリーさん

「これまで、骨折は自分の対応範囲外だと思っていました。この研修で適切に対応できる自信がつきました。知識は力なので、これから地域の人たちにも伝えていきたいです。」

スーダンの村が「街」になった
ロシナンテスとあなたで創った20年

ロシナンテスは、2026年に設立20周年を迎えました。
最初の事業地は、スーダン・ガダーレフ州シェリフ・ハサバッラ村。
医療を届けることから始まった歩みは、水、教育、栄養へと広がり、
やがて村そのものを変えていきました。
今、ハサバッラ村は、かつての「村」から「街」と呼べる姿へと発展しています。
この変化は、皆さまのご支援なくしては生まれませんでした。
その軌跡を、あらためてお伝えします。

人々は川やため池の不衛生な水を利用していました

診療所はあっても使われていない村

ロシナンテスが医療支援を始めたのは、ガダーレフ州シェリフ・ハサバッラ村。

ガダーレフ州は、理事長川原が日本大使館の医務官として勤務していた際、致死率の高い寄生虫疾患、リーシュマニア症の視察で訪れた場所です。病院には患者が溢れ、敷地内の木の下にベッドが置かれ、ひとつのベッドに二人が寝かされる劣悪な状況でした。

「この地域で医療支援をしよう」そう決意したことが、すべての始まりでした。ハサバッラ村には診療所と呼ばれる建物はありましたが、設備も薬もなく、医療スタッフもいない状態で、診療所は、名前だけの存在でした。

さらに、多くの住民は動物の排泄物などで汚染された川の水を生活用水として使用しており、慢性的な下痢や感染症が後を絶ちませんでした。解決すべき問題は、医療だけの問題ではなかったのです。

病だけではない、その「背景」を治す

ロシナンテスはおよそ6年間にわたり、村長や住民たちと話し合いを重ねながら、医療だけにとどまらない包括的な支援を行いました。
「病気そのものではなく、病気が生まれる背景を変える」、それがロシナンテスの取り組みでした。

巡回診療の開始（2007年～）

何もなかった診療所に必要な医療機材を整え、医療スタッフを配置。巡回診療を開始しました。日本から中古の救急車も寄贈し、患者を搬送できる体制を整えました。

助産師による妊婦健診・栄養指導（2008年, 2010年～）

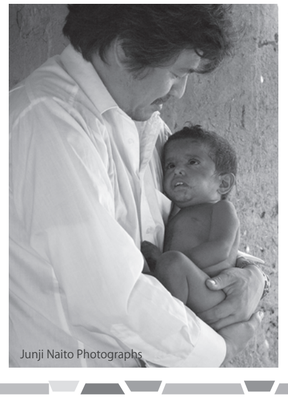
診療所に助産師を配置し、定期的に妊産婦健診を実施することで受診の定着を図りました。2010年からは妊産婦や母親たちに対し、地元で手に入る食材を使った栄養指導を実施。特別な食材ではなく、「今あるもの」で子どもを守る知識を届けました。

給水所の整備（2009年）

いくら患者を治療しても、原因となる水が不衛生では、同じことの繰り返しです。安全な水を確保するため、井戸を改修し、村の人々と共に給水所を整備しました。

女子小学校の建設（2009年）

近くに給水所ができたことで、水くみの役割を担っていた女の子たちに学ぶ時間ができました。将来、村に看護師や助産師などの医療人材が育つようにと、女の子も教育を受けられるよう女子小学校を建設しました。



出会ったひとりの男の子

活動をする中で、特に気がかりな子どもがいました。
2歳のムザンメル君です。

彼の家庭は村の中でも特に貧しく、重度の栄養失調の状態でした。成長が遅れ、歩くこともできず、つかまり立ちすらできませんでした。

しかし、継続的に栄養のある食事を摂り続けることで、少しずつ状態は改善。

やがて、つかまり立ちができるようになったのです。小さな一歩でしたが、村にとっても、私たちにとっても、大きな希望でした。

突然の活動停止命令

しかし2012年、スーダン政府より、ロシナンテスを含む複数の外国のNGOに対し、突然の活動停止命令が出されました。当時、スーダンは国際関係が緊張状態にあり、その影響を受けたものでした。

交渉の結果、1年間の猶予期間が認められ、その間に村の人々だけで運営できる体制を整える「出口戦略」を進めました。名目上は活動停止となりながらも、支援が途切れないよう工夫しながら事業を引き継ぎました。

そして1年後、私たちはハサバッラ村から撤退しました。その後もフォローアップ訪問を願い出てきましたが、再訪は長らく認められませんでした。

10年後、村は歩みを止めていなかった

2022年にハサバッラ村を再訪することができました。
嬉しいことに、診療所も、給水所も、女子小学校も、すべてが稼働していたのです。

救急車や給水所が故障したこともあったそうです。しかし村の人々は、有料で運営していた診療所や給水システムのおかげで、上手にお金を管理していて、修理費を工面し、運営を続けていました。

さらに、村から大学へ進学する若者が現れました。女子小学校を卒業し、看護を学ぶために大学へ進んだ少女。そして医学部へ進学し、医師を目指す若者も生まれています。

かつてこの村では、ほとんどの大人は読み書きができませんでした。しかしロシナンテスと共に歩むうちに、学ぶことの大切さを知り、自分の子どもたちには高等教育を受けさせていたのです。

外からの支援がなくても、自分たちで運営できる。ロシナンテスが目指してきた「持続可能な支援」の姿が、ここにありました。

運営システム含めきちんと機能していた給水所

2022年再訪した際の女子学校の様子

ムザンメル君はいま

2026年4月、ムザンメル君とその家族に再会することができました。現在は川を挟んだ別の地域に暮らしていますが、村にロシナンテスが来ると聞き、船と徒歩で時間をかけて会いに来てくれました。かつて栄養不良で立つことも難しかった彼は16歳の少年になりました。体の成長はゆっくりながらも、学校にも通っていると、元気な笑顔を見せてくれました。お母さんは、当時栄養指導を受けたロシナンテスの看護師のことをよく覚えており、「あの支援がなければ、この子たちは生きられなかったかもしれない」と繰り返し感謝の言葉を伝えてくれました。

ムザンメル君（左）、双子のマーゼン君（右）、二人のお母さん（中央）

村の診療所スタッフ。川原の両脇にいる2名はロシナンテス活動当時からのメンバー

農業用の重機が導入されていました

2026年ー村の現在の様子を聞きました

ハサバッラ村の風景は、この20年で大きく変わりました。家々の敷地の外壁は、木の柵からトタンに替わり風景が一変していました。村の中心にはモスクができ、人々の生活の拠り所となっています。

村長ハサンさんのもとでは、農業にトラクターなどの重機が導入され、生産の幅が広がりました。また、息子さんはなんと海外へ留学し、経済やエンジニアの勉強をしているそうです。

村の診療所は現在も運営され、スタッフのうち2名は当時と同じメンバーです。ロシナンテスの設置した給水所も引き続き使われており、現在はソーラーパネルによって水をくみ上げていました。燃料価格の高騰に影響を受けず、安定して水が供給されています。また学校は一時、内戦による避難民の生活の場として使われていましたが、現在は帰還が進み、5月から再開できることになったそうです。

20年の感謝をこめて

ロシナンテスは「医」を取り巻く環境を包括的に整える支援を続けてきました。私たちの支援は、きっかけに過ぎません。人々が自ら立ち、自分たちの力で地域を発展させていくこと。これこそが、目指してきた形です。

しかし2023年4月、スーダンで軍事衝突が勃発しました。ハサバッラ村は、戦闘の直接的な被害は受けていませんが、避難民の流入などで生活・医療物資の不足・高騰などの影響が出ています。

困難な状況ですが、それでも、私たちは歩みを止めません。新たな救急車の寄贈、国連と協働したデジタルヘルスによる母子保健事業など、できることからスーダンの人々への支援を続けています。近いうちに、このガダーレフ州の別の地域で、新たな給水所建設も行いたいと考えています。

ハサバッラ村の変化は、ロシナンテスだけでなく、皆さまと共に創った20年の証です。ご支援いただきました皆さまに心から感謝申し上げます。そしてこれからも、共に歩んでいただけましたら幸いです。

ザンビアでの6年
挑戦の先に生まれた確かな成果

スーダンで培った経験を活かし、2019年よりザンビアでの活動を開始しました。
医療へのアクセスが限られる村落部で、新しい技術の活用や医療従事者の育成を進めながら、
地域と共に医療体制を構築してきました。
その結果、母子保健と結核対策の2つの柱で、確かな成果が生まれています。

母子保健事業　妊産婦さんと赤ちゃんの命を守る取り組み

チサンバ郡ムワプラ診療所のマザーシェルター

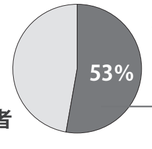
2つのマザーシェルターでの出産（2021年～2025年）
944件

エコー研修（2021年～2026年3月）
29回実施
のべ48名が参加

村落部では家から診療所までが遠く、自宅で出産したり、診療所に向かう途中で出産したりするケースが少なくありません。こうした状況を改善し、施設での安全なお産を増やすことを目指して、2つの地域で出産待機施設「マザーシェルター」を建設しました。またエコー健診を導入し、妊娠経過の確認や妊娠中の危険な兆候を早期に発見できるよう診療体制を構築しています。

結核事業　持ち運びできるX線装置で早期発見を目指す

結核患者882件
（2023年8月～2025年10月）



ポータブルX線で診断
466件

治療ににつなげ完治した患者
（2023年8月～2025年6月）
治療中の患者692人のうち579人　治療成功率 83.7%

ザンビアでは結核が依然として深刻な感染症のひとつです。
検査体制が整っていない村落部において、ポータブルX線装置を使って巡回検診を行っています。結核を早期に発見し治療につなげることで、結核の感染拡大の防止と、命を守る取り組みが進んでいます。

新エコー導入、母子保健事業の進展を目指して

ザンビアの村落部で実施している母子保健事業では、2021年より中央州チサンバ郡の8つの診療所でエコー健診を継続しています。2026年、新たなエコー機器「バタフライ」を導入しました。

「デジタル化の見直し」現場に根ざした決断

以前のエコーには、健診情報をデジタルで網羅的に記録する機能が備わっていました。医療DX（デジタルトランスフォーメーション）の第一歩として試験運用を重ねてきましたが、デジタルに一本化することがまだまだ難しい現場では、紙媒体との二重記録が避けられず、かえって医療スタッフの負担を増やす結果となりました。私たちは「現場に過度な負担を強いるデジタル化は本末転倒である」と判断し、データ管理システムを一度終了するという苦渋の決断を下しました。

エコー画面を見て笑みを浮かべる妊婦さん

デジタル化は将来あらためて取り組むこととし、今回は純粋な診断機能の向上に重点を置きました。その結果、選ばれたのが「バタフライ」です。画質は格段に向上し、表示端末をスマートフォンからタブレットに変更したことで画面も大きくなりました。医療施設のスタッフからは「計測や診断がスムーズになった」と喜びの声が上がっています。

お母さんも笑顔に 新機器が生んだ変化

機器を変えたことは、スタッフの意欲にも変化をもたらしました。「もっと手技を高めたい」「もっと学びたい」という声が聞かれ、現場の学習意欲は一段と高まっています。

健診中に赤ちゃんの心拍が確認できると、その様子をお母さんにも見てもらいます。その瞬間、それまで緊張していた表情がやわらぎ、どのお母さんも嬉しそうに笑顔を見せてくれます。

専門医の協力を得て 運用体制づくり

新しい機器の導入といっても、単に配備して終わりではありません。各施設のスタッフが機能を十分に使いこなし、適切にメンテナンスできるよう、2026年1月から各施設を訪問し、丁寧なオリエンテーションを実施しました。2月には全8施設への配備を完了し、ようやく本格的な運用体制が整いました。

ちょうどこの時期、産婦人科医の垰村先生が約2か月間ザンビアに滞在してくださいました。先生は連日のように各施設を巡り、スタッフ一人ひとりの手に触れながら、実践的なエコー技術を丁寧に指導してくださいました。

産婦人科医の垰村先生によるエコー研修

ハードとソフトの支援が生む相乗効果

新しいデバイス「バタフライ」と、専門医による指導。この二つが重なったことで、スタッフの技術向上への意欲はかつてないほど高まっています。真剣なまなざしで学ぶ姿からは、医療従事者としての誇りと責任感が伝わってきます。

もちろん、数回の研修ですべてが完結するわけではありません。診断の正確性を維持し、事業を持続可能なものとするためには、継続的なフォローアップと学びの機会が欠かせません。母子保健事業がさらに発展し、より多くの母子の命と健康を支えられるよう、これからも一歩ずつ取り組んでまいります。こうした活動はすべて、ご支援者の皆さまの温かいご支援によって支えられています。改めて心から感謝申し上げます。

ザンビア ニャンジャ語【挨拶フレーズ】

ザンビアには、70以上の現地語がありますが、
なかでもニャンジャ語は、首都ルサカを含め多くの人々に
話されている主要な言語のひとつです。

【基本挨拶】

ごきげんいかがですか?
Muli Bwanji? (ムリ ブワンジ)

元気です
Nili Bwino (ニリ ブウィノ)
私　良い
または **Bwino Bwino** (ブウィノ ブウィノ)

あなたはどうですか？
Nanga Imwe? (ナンガ イムウェ)
あなた

おはようございます。**Mwauka Bwanji?** (ムワゥカ ブワンジ)
〈返事〉おはようございます。**Mwauka Bwino** (ムワゥカ ブウィノ)
こんにちは **Mwachoma Bwanji?** (ムワチョマ ブワンジ)
〈返事〉こんにちは **Mwachoma Bwino** (ムワチョマ ブウィノ)

【自己紹介する時には】

私の名前は○○です
Dzine langa Ndine ○○
(ズィナ ランガ ンディネ 名前○○)

名前が発音しづらいために
覚えてくれない場合は、
ザンビアネームをつけてもらうこともあります！

【よく使う表現】

はい: **Ee** (エェー)
いいえ: **Iyai** (イヤイ)
ありがとう: **Dzikomo** (ズィコモ)
どうもありがとう:**Dzikomo Kwambili** (ズィコモ クゥワンビリ)
じゃあね: **Naenda** (ナエンダ)
また明日: **Tizaonana mailo** (ティザオナナ マイロ)

INFORMATION　イベント・ボランティアのお知らせ＆スケジュール

参加費無料 ぜひご参加ください

【5月～6月】事務作業ボランティア募集!

（北九州・東京・山梨）

ご支援者の皆さまにお届けするカードづくりをお手伝いいただけるボランティアさんを募集しています。アフリカ布を切って貼るだけの簡単な作業で、どなたでもご参加可能です。

作業の合間に、ロシナンテスの活動についてもご紹介できればと思います。

地味な作業が苦にならない方、ぜひご協力をお願いいたします！

定員 ：各回10名程度
持ち物：蓋のついた飲み物、(ある方は)布切ばさみ・ピンキングばさみ
※はさみのご用意が難しい場合には、お貸出し可能です
※もし不要な未使用はがきや書き損じはがき、未使用切手などあればお持ち込みください
申込URL:https://www.rocinantes.org/news/information/?no=277

北九州開催	全5回開催	場所：北九州市立商工貿易会館7F会議室 住所：福岡県北九州市小倉北区古船場町1-35

①2026年5月17日(日)　15:00開始／17:00終了
②2026年5月18日(月)　10:00開始／12:00終了
③2026年5月18日(月)　14:00開始／16:00終了
④2026年5月19日(火)　10:00開始／12:00終了
⑤2026年5月19日(火)　14:00開始／16:00終了

東京開催	全4回開催	場所：会議室メイプル 新宿タカシマヤ前 住所：東京都新宿区新宿4-1-22 新宿コムロビル7F

①2026年5月28日(木)　14:00開始／16:00終了
②2026年5月28日(木)　18:00開始／20:00終了
③2026年5月30日(土)　10:00開始／12:00終了
④2026年5月30日(土)　14:00開始／16:00終了

山梨開催	場所：山梨県立図書館 交流ルーム101 住所：山梨県甲府市北口2丁目8番1号

①2026年6月7日(日)　14:00開始／16:00終了

お申込フォームの利用が難しい方は、メールもしくはお電話でご連絡ください。
■メール　info@rocinantes.org
件名／イベント申込　もしくは　ボランティア申込
メール本文に以下の項目のご記載をお願いいたします。
・参加希望の日付・お名前・メールアドレス・事前に聞きたいことなど
■ お電話　TEL：093-521-6470
認定NPO法人ロシナンテス （受付：平日10時～17時）

▶5月16日(土) “実家のこれから”を考える

相続・空き家対策と社会に活かす選択＜福岡編＞（オンライン）

親から受け継ぐ実家について、「どうすればいいかわからない」「そのままにしている」といったお悩みはありませんか？空き家は相続をきっかけに発生することが多く、放置すると防災・防犯など地域にも影響を及ぼします。

本セミナーでは専門家が、相続時の課題や空き家のリスク、福岡での売却・活用・整理の選択肢、「売れない不動産」への対応方法まで解説します。あわせて、実家や資産を社会に活かす方法として、生前にできることや遺贈寄付についてもご紹介します。ぜひご参加ください。

日時：2026年5月16日(土)　13:30開始／15:00終了
場所：オンライン(zoom)
定員：60名
登壇：山口諒さま（相続・不動産サポートセンター）、
　　齋藤弘道さま（遺贈寄附推進機構）
共催：認定NPO法人フードバンク北九州ライフアゲイン／
　　認定NPO法人抱樸／認定NPO法人ロシナンテス
申込URL: https://www.rocinantes.org/news/event/?no=276

▶6月14日(日)　ご支援者さま限定

理事長川原によるスーダン活動報告会（オンライン）

理事川原よりスーダンの現状や最新の活動についてお伝えする、ご支援者さま限定の報告会を開催いたします。

2023年4月にスーダンで内戦が勃発し、日本人職員が国外退避して以降、長年取り組んできた村落部での支援事業は停止していました。しかし2026年に入り、再開に向けた体制が整ったため、様々な活動を始めています。当日は、救急車の寄贈や、紅海州における国連と協働した母子保健事業、現地の情勢についてなど、最新の活動状況を理事長川原よりご報告いたします。

日時：2026年6月14日(日)　15:30開始／17:00終了
場所：オンライン（zoom）
対象者：ロシナンテスへご寄付いただいたことのある方
申込URL：https://www.rocinantes.org/news/event/?no=279

EVENT REPORT　イベント報告

駐在員報告会＠滋賀・愛知・奈良・オンライン

▶2025年10月25日、11月29日、11月30日、2026年2月15日

2025年秋、ロシナンテスは滋賀（10月25日）、愛知（11月29日）、奈良（11月30日）の3県で、駐在員による報告会「スーダンとザンビアで暮らした職員が、アフリカの風をお届けします」を開催しました。

当日は、駐在経験をもつ職員が、スーダンやザンビアの文化や暮らし、ロシナンテスの医療・教育・水支援などの活動について、写真や映像を交えながら紹介し、来場者の皆さまと対話を行いました。さらに2月15日には、同内容のオンラインイベントも開催しました。

ご参加いただいた皆さまからは、「駐在員の方が肌で感じたことを、それぞれの言葉で聞けてよかった」「生活や歴史について知ることができてよかった」「国民性が優しいと聞き、訪れてみたくなった」といったうれしい感想が寄せられました。対面とオンラインの双方を通じて、アフリカの今とロシナンテスの活動をより深く知っていただく機会となりました。

理事長川原による講演会＠愛知

▶2025年12月13日

2025年12月13日、愛知県名古屋市にて、理事長川原による講演会「究極の医療は戦争をしないこと、させないこと～スーダン内戦を経験して～」を開催しました。

長年活動してきたスーダンで内戦が勃発してから2年8か月が経過した現在の状況や、現地の人々の苦しみ、今後の見通しについて、写真を交えながらお話ししました。あわせて、外務省を辞して団体を立ち上げた経緯や、設立から現在に至るまでの活動の広がり、ザンビアでの新たな取り組みについても紹介し、ロシナンテスの歩みを振り返りました。

参加者からは、「医療だけでなく水や教育も支援していることが印象的だった」「発想と行動力、人間力に感動と勇気をもらった」「生徒にも聞かせたい」といった感想が寄せられました。遠く離れたスーダンの現状をお伝えできたことで、対話の深まる講演会となりました。今後もさまざまな機会を通じて、ご報告していきたいと思います。